

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-2

高さ3・5m、広さ140㎡余りの地下蔵の奥の方にある2段に区切られた棚に、225畧の木樽が30本ばかり収納されていた。

ある種の驚きを持って地下蔵全体を見渡していた辰巳に、「どうぞこちらへ」と麻里子は言う前から、樽の栓をひねって中身を注いだテイ스팅グラスを渡した。

「麹菌は？」と辰巳は香りと味を吟味してから訊ねた。

「黄麹です」と麻里子は言って、女杜氏の顔をふっと覗かせてみせた。

「寝かせてどれくらいなのかな」と辰巳はグラスを灯りにかざして酒の色を目視しながら訊ねた。

「兄が、いえ、社長が亡くなる1年位前に樽詰めしましたので、2年程になりますか」

「年季の入った木樽のようだが……」

「ええ、ここから北へ1時間ばかり行った所にある『Sワイナリー』から分けてもらった白ワインの空き樽です。そのワイナリーは斜面の自家畑でシャルドネを栽培しています」

「なるほどね。心血を注いだという訳だ」

「はい？」

「いやいや、いいんだ」と辰巳は言いはぐらかすのに、テイ스팅グラスを傾けて利き酒を続けた。

麻里子は肩透かしを食らったような気まずい思いを払拭するかのよう傍らの一升甕の蓋を取ってステンレス柄杓で中身をぐい呑みに注いで辰巳に渡して言った。

「これは真紀さんからお聞きになった杏仁のリキュールです」

「こいつに逢いたかったんです！」と声高に言って、麻里子に始めて見せた表情でぐい呑みを受け取った辰巳は、おもむろに中身を棚に置いてあった空のテイ스팅グラスに移し替えると、これまでも増して慎重に利き酒をする。

「これが1年で……？」と辰巳は目を光らせて一滴一滴を嚙み砕くようにして口走った。

「……ええ、1年位前です。この焼酎と種のままの杏仁と氷砂糖を素焼きの甕に入れておいただけです。梅酒を作るのとほとんど変わりません」と麻里子は努めて冷静に言ったけれど、相手の顔が、パッと変貌したことを見逃してはいなかった。

「近くにあんずの花で有名な観光地があるそうだね。名産品としてこれに似たような物があってもおかしくないと思うのだが？」と辰巳は言って、駄目を押した。